

12.10 自然災害に関心を持つことの大切さ（2）

災害列島であることは、我々ではどうにもできませんが、それによる災害対応は我々の手で最小にすることはできると思います。極端に言えば、災害の対象物をなくす、あるいは減らすことです。そのためには、この災害列島を上手に使い分けること、つまりいまの状況を変えることです。わが国は人口と財産が沿岸の平野部に集中し、地方におけるこれまでの生活域、国土の7割の山地と流域では災害リスクはかなりの高さです。災害リスクを減らすには、自然災害への関心を高めることが必要で、学校教育が大きな役割を果たし、地域が暮らしの環境を長期の目で見直すことだと思います。このままのありかたで、安全で、安心した暮らしが少子高齢化、財政難の中で継続できるのか、ということです。

これまでは、何とか生きてきたかもしれませんが、それはスポット的なことで、持続するものではなかったのではないのでしょうか。チーム力が暮らしの大きな力になるには、一時的な起爆剤や一過性のものではなく、継続するためにはじっくりと持続していくべきものがあるはずです。基礎力がないのでは、一時の栄華はチーム力にはつながりません。

安全と風土を脅かすものは回避し、国土全体の利活用を真剣に考えることが必要になっているわけで、目先のことだけに視野を狭窄していると、手遅れになるというかその入り口に入っているということではないのでしょうか。国土保全にはハード対策による強靱化も流域治水もそれ自体は有効ではありますが、同時に大きな視野での環境の整備を見据えて落とし込んでいかないと後々の重荷になります。つまり、しっかりとした災害列島での利活用の理念があって、それぞれに対応するということがないといけないということです。

そのためにも、災害にかかわる多くの方々が、分野を超えて列島論を語り、国民の同意を得ながら政策化していくというような一元的な考え方、組織が必要な気がします。もちろん、各論的には痛みや権限の縮小などがありますが、それを超えるところに今の状況があるということです。予算や人材など多くの悩みを合理的に集合することで対応できるような気がしますし、それへのスタートを切るべきです。憲法改正論議と同じぐらいの国土の健全性を見直し論があってもよいと思います。いまの日本列島、暮らしの足元は変動期に入っていて、安心できる材料は何もないのではないのでしょうか。何かあればわが国には神風が吹くと思っている、のんきな国民性なのではないのでしょうか？それとも成長信仰をいまだに夢見ているのでしょうか？社会の真の強靱化を政策として国民の関心を集中させる状況に至っているような気がします。

自然災害に関心を持つことは、その暮らしの環境を知り、気づくことで考えるというようなプロセスを経験することでもあると思います。自然災害は自然環境を根源とする自然現象によってもたらされるわけで、この自然環境は、多様性に富んでいるがゆえに人間は知恵や工夫を重ねながら折り合いをつけて恐怖とめぐみを享受してきました。この関係が持続していくために、自然災害を切り口に自然環境の仕組みを知ることは大変重要なことではないのでしょうか。